

国立民族学博物館（以下、民博）には、収蔵資料の情報を民族別に調べることができる「標本資料目録データベース」がある。私が主な調査対象としてきた米国とメキシコに居住する先住民ヤキに関しては、米国で収集された7点とメキシコで収集された37点、計44点の収蔵資料がある。その多くは仮面や楽器であり、それらは、太陽や鹿を崇める自然崇拜とキリスト教が混淆して生み出されたヤキの精神世界を体現する儀礼に使われる。

ヤキに関する私の中心的な研究テーマは、物質文化ではない。しかし、民博で2013年に開始された本共同研究と、フォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「北米先住民民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」（代表者 伊藤敦規、2014年6月～2018年3月）への参加を通じて、収蔵資料を介して調査対象の人々とかかわる様々な方法を学びつつある。そしてその間に、私はヤキに関する収蔵資料の処遇を、現地の意見に基づいて決定する過程を手助けする機会に恵まれた。本稿は、この出来事を「ソースコミュニティとの協働」の一事例として記録するものである。

「パリサイ人の仮面」

これまでの調査の中で、私は次のような話を耳にしたことがある。ヤキの儀礼に使われる仮面は、工芸品として集落外の人々に販売されることもある。そして、工芸品としての仮面と儀礼用品としての仮面の間の形状に差はない。しかし制作が始まる時点で、作り手は、販売目的の仮面と実際に儀礼に利用される仮面を明確に区別している。つまり、同じ形状をしたものに異なる意味や役割が与えられている場合があるのである。ヤキ社会においては、儀礼用品として制作された上、すでに使用された物が集落外に持ち出されることは好まれない。なぜなら、一部の儀礼用品は、使用後に焼却処分をしないと集落に禍をもたらすと信じられているためである。また、儀礼用品の一部に女性が触れることは禁じられている。

民博の収蔵資料を熟覧したところ、本来であれば使用後に焼却されるべき儀礼用品の「パリサイ人の仮面（Chapayeka mask）」が含まれていた。しかし上に述べたように、ヤキに関する資料の場合、儀礼用に制作されたのか、それとも販売用であったのか、そして実際に儀礼で利用されたのか、といった点を確かめなければ的確な対応ができない。収集記録からは、それらの事情は特定できなかった。

さて、博物館に収蔵された先住民に関する資料を彼らの元に返還することが、現在世界的に主流となっており、私自身も基本的には先住民コミュニティが所有するべき資料が返還されることには賛成する。しかし、収蔵に至る経緯やコミュニティ側の事情を確認しないままの返還は、さらなる問題を引き起こす場合がある。「パリサイ人の仮面」の存在を確認した際、まず私の頭に浮かんだ対応方法が「返還もしくは処分」であったことは事実だが、上記の事情を踏まえ、詳細を確かめながら対応することになった。

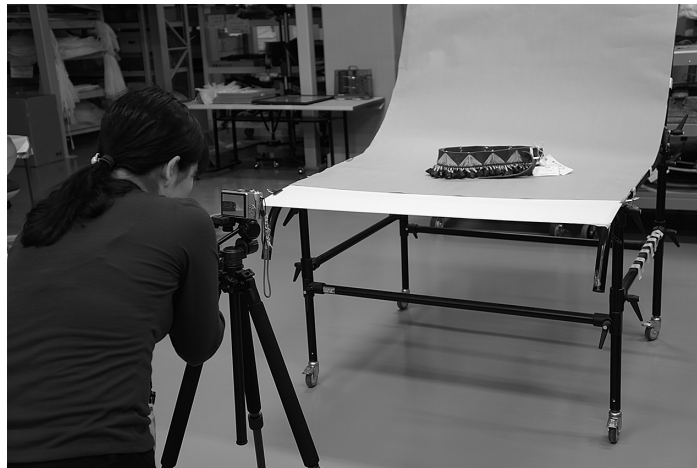
ヤキの人々への連絡

現在の米国では、先住民の集団は「トライブ」という単位で表されることが多い。ある先住民言語や文化を共有する人々の集団を指す言葉である「先民族」とは異なり、「トライブ」とは20世紀に入ってから米国政府が定める形で構成された先住民の集団である。そのため、1つの先民族が1つのトライブを構成することもあるが、1つの先民族が複数のトライブに分割されていることも、逆に複数の先民族が1つのトライブにまとめられていることもある。ヤキの場合、米国側に居住する人々のうち、アリゾナ州に居住している人々を中心として構成されているのがパスクア・ヤキ・トライブである。

2014年4月に、パスクア・ヤキ・トライブ政府の

議員であるロバート・バレンシア氏に、ヤキの資料が日本の民博に収蔵されており、その中に「パリサイ人の仮面」が含まれている旨を、電子メールで伝えた。トライブ長を務めた経験もあるバレンシア氏は、米国のアメリカ自然史博物館に収蔵されていた資料と遺骨が2009年にメキシコのヤキ集落に返還された際、様々な手続きにおいて中心的な役割を果たした人物である。バレンシア氏は博物館とのやり取りにも慣れている上、米国とメキシコの両国に点在する複数のヤキ集落とつながりを持っている。民博の収蔵資料が米国とメキシコの両方で収集されたことも考慮すると、本件について相談するにはもっとも適していた。

バレンシア氏から、まず収蔵資料を詳しく写真で見たいとの返信があった。そのため、資料を複数の角度から撮影した画像に収集記録を英訳して添えたリストを作成し、2014年7月に再び電子メールでバレンシア氏に送った。同氏からの返信には、次の点が記されていた。(1) リストにはヤキの資料



リスト作成のための写真撮影 (2014年5月30日、民博収蔵庫、伊藤敦規撮影)。

だけでなく、地理的にヤキと近い場所に居住してきた先住民マヨのものだと思われる資料が含まれている。(2) リスト内で資料の用途として示されている情報に誤記が見られる。(3) 民博にある「パリサイ人の仮面」が、博物館向けに作られた複製なのか、それとも儀礼で利用されたものなのか、写真からは判断できない。さらに、トライブ政府によると、この仮面は以前アリゾナ州のハード博物館に収蔵されていたものである。(4) 「パリサイ人の仮面」は、かりにそれが複製であったとしても、集落外にあることが問題視される可能性がある。パスクア・ヤキ・トライブ政府もしくはヤキの他の集団が民博に対して資料の返還を求めるべきか、関係者の間で検討したい。バレンシア氏は、これらの点を踏まえた上で、現地での関係者と対応を協議してくれることになった。

現地での話し合いと決定事項

私は2014年8月に米国アリゾナ州のパスクア・ヤキ保留地を訪問し、バレンシア氏と、パスクア・ヤキ政府言語文化省のダニエル・ベガ氏に面会し、本件について話し合いを行った。まずバレンシア氏から、他のヤキの人々も含めた話し合いの結果が報告された。資料全体に関する報告の概要は次の通りであった。(1) ほとんどの収蔵資料は、現在の方法で保管してよい。(2) 収蔵資料の中には、古くて貴重なものも含まれており、それらが大切に保管されていることをうれしく思う。(3) 一部の資料はマヨに関するものなので、情報を修正してほしい。さらに、「パリサイ人の仮面」について、次のような報告があった。(4) ヤキが現在よりも貧しかった時代に、生活の糧を稼ぐため、販売用の仮面を制作していた。現在民博に収蔵されている資料もそれらの一部かもしれない。(5) 「パリサイ人の仮面」は、正式なものはヤギの皮、簡略化されたものは段ボールで作られる。民博収蔵の資料は段ボール製なので、正式な儀礼用品とは言えず、返還される必要はない。

続いて、「パリサイ人の仮面」の取り扱いに関して、民博への具体的な要望が伝えられた。(1) 「パリサイ人の仮面」は、正面を壁に向ける、正面を床に向ける、全体に袋を被せる、のいずれかの方法で保管してほしい。(2) 女性の学芸員は仮面に触れないでほしい。私はこれらの報告と要望を、帰国後に民博に伝えた。なお、ほかに民族として要求する事項があれば追って連絡する、とのことであったが、本稿執筆時の



米国のヤキ集落が位置するソノラ砂漠の風景（2010年9月17日、米国アリゾナ州トゥーソン市、水谷裕佳撮影）。

2016年8月までに追加事項に関する連絡は届いていない。現在「パリサイの人の仮面」が保管されている民博の収蔵庫内の棚には、取扱いに関する上記の注意事項が貼り出されており、常時職員等の目に触れるようになっている。

資料の背景を踏まえた対応の必要性

研究者は、調査のために繰り返しソースコミュニティを訪れる上、博物館を初めとする研究機関ともつながりを持つため、両者の仲介役として選ばれる可能性が高い立場にある。1990年の米国先住民墓地保護・返還法制定によって、米国内では先住民に関する資料をソースコミュニティに返還する機運が高まっている。同法は米国内でのみ有効であるとはいえ、資料返還に関する手続きのノウハウを蓄積した先住民トライブが、米国外の博物館に資料返還を求めるケースも生じるようになってきた。また、他国の先住民が、米国の先住民トライブの活動に触発されていく可能性もある。そのような流れを考慮すると、物質文化以外を専門としていたとしても、研究者が資料返還要求や所蔵博物館内での取り扱いに関する協議に携わる機会は今後さらに増加していくのではなかろうか。

米国内のヤキ集落を主な調査地とする私は、すでに上に述べたような事情を理解していた。同時に、自らが博物館収蔵資料の返還や取り扱いについての協議に関わることで、私とソースコミュニティの関係性が崩れてしまうのではないかと不安に感じていた。なぜなら私は、資料に関する協議をあたかも「先住民と博物館の抗争」の一種であるかのように捉えていたからである。しかし実際に関わってみると、すくなくとも今回のケースは、終始穏やかな雰囲気の下で、混乱もなく進められた。さらに、先住民と博物館の協議の結論には、資料の返還以外の方法もあり得ることを学んだことは、私にとって新鮮な体験であった。博物館の全ての収蔵資料には、異なる収集の経緯やソースコミュニティの事情が存在する。それらを可能な限り詳細に調べ、それぞれのケースに最適な対応を探るべきである、というきわめて基本的な事実、私はあらためて気づかされたように思う。

みづたに ゆか

上智大学グローバル教育センター准教授。専門は文化人類学、北米先住民研究、境界研究。著書に『先住民パスクア・ヤキの米国編入—越境と認定』（北海道大学出版会 2012年）、論文に「展示品をめぐる対話—北海道と東京における〈北米先住民ヤキの世界〉展」（高倉浩樹編『展示する人類学—日本と異文化をつなぐ対話』昭和堂 2014年）など。



パスクア・ヤキ保留地入口（2010年4月14日、米国アリゾナ州パスクア・ヤキ保留地、水谷裕佳撮影）。